

裸のサル



タイトル	「裸のサル」
原題	The Naked Ape
著者	デズモンド・モリス(Desmond Morris)
訳者	日高敏隆
出版社	角川文庫
発売日	1999年6月25日
ページ数	292p

本というのは面白いもので、最初の印象が大切です。かって、ピーター・ベンチュリーの「JAWS」（ジョーズ）を本屋で立ち読みしていた時のことです。イントロの部分からぐいぐい引きずり込まれ、あまり長居も出来ないのので、ついに購入しその日のうちに読んでしまいました。その後、27歳という若いステイブン・スピルバーグ監督で映画化され話題を呼びましたが、「海を知らない奴が撮ってるからリアリティがない、つまらない。くだらない。」と言ったのは今の東京都知事の石原慎太郎氏でした。

この種の冒頭から引きずり込まれる本に出会うという経験は殆どありませんが、D. モリスの「裸のサル」は、「JAWS」に似た経験をさせてくれた本の一冊です。

「裸のサル」の副題は「動物学的人間像」ですが、初版が出たのが1969年です。私が読んだのも大学の工学部にいた頃ですから随分昔になります。大学進学に際して、医学部か工学部か農学部か随分迷いましたが、医者には「修繕業」、工学部は「ものづくり」、生物学は「混沌の極み」と考え、結局工学部を選びました。

この本に出会ったのは、進路が確定し、本格的な専門の勉強を始めた大学の2年生の頃でした。その時に感じたのは、「もう2~3年早くこの本に接していたら、農学部に進んだかも知れないなあ」という後悔の念に近いものでした。

皆さんもご存知でしょうが、生き物を扱う学問には四つあり、

一つ目は医学部 これは、「人」という動物を相手にします。

二つ目は獣医学科 これは、「人以外の哺乳類、鳥類それと爬虫類」が相手です。

三つ目は水産学科 これは、「魚類」を相手にします。

四つ目は理学部の動物学科 これは、「背骨のない無脊椎動物、ウニや昆虫など」を相手にします。

生き物を相手に研究してみたいと思っている若い皆さんは将来進むべき道を考える場合、まず進むべき分野の分類をしっかりとっておきましょう。

ほんの少しですが、中身を紹介しましょう。

まず、「裸のサル」の一番最初の印象はというと、「とても面白いけど、仮説だらけでどれ一つとして検証されていないのではないか」ということでした。「随分乱暴な内容だな」とあきれてたぐらいいですから印象も強烈でした。その後、遺伝子工学の発展で検証されたものもあれば、そうでないものもあり、大きな進展は見られていません。中には「我田引水」「牽強付会」のものもありますが、「それより何より、当時これだけの「仮説」を提言できるだけでも「すごいな」と思ったものです。



我が家の豆柴愛犬プー
(若かりし頃の写真です)

さて、我が家の犬を見ていると、つい自分の顔と比較してしまいます。「目はおなじだなあ」「耳は犬の方が性能がよさそうだなあ」「・・・」ときて、さて口はどうかとなりました。人間の口の周りの唇は粘膜ですね。つまり内腔が外に出ているわけです。動物では、本来こんな弱いところが外に剥き出しになってはいけませんね。動物と比較すると、粘膜が剥き出しになっているのは、人間だけです。何故でしょう？

動物は四足歩行で、人のように直立歩行ではありません。人が人になったのは、森林からサバンナに下りてきて、しかも食べられる側から狩猟によって食べる側に変身したことです。狩猟をするには道具が必要ですが、そのためには二本の足で立って手を自由に動かさなくてはなりません。ということは、火や道具を使うということは直立歩行後ということになります。

ところで、人が直立することによってどんな問題が起きたのでしょうか。雄と雌の関係でいうと、雄はともかく、雌の性器が見えなくなります。犬や猫を見れば分かりますが、四足では後ろから見る事が出来ます。我が家の雌犬も発情期には膨らんで黒ずんだりしますからすぐ分かります。

ところが、人は直立歩行することによって性器が見えなくなり、雌が雄を誘惑できなくなりました。ではどうしたかということ、同じ粘膜である唇を外に出して、唇の赤で雄を誘惑したのだと D. モリスは言います。「ほんまかいな」

との疑問にも、彼は答えを用意しています。

「では、黒人はどうなんだ」という質問にも答えてくれます。黒人はもともと暑いところにいますから、メラニン色素が沢山出ます。肌が黒いわけですから、唇の赤い色が目立たなくなります。白人や黄色人種では唇の赤はよく分かりますが、あれだけ真っ黒い顔になると唇が何処にあるか良く分かりません。そこで、どうしたかという、唇を厚くしてこの問題を解決したというのです。

この話を仲間に話すと、「なるほど、そういう風に唇は役に立っているのか。唇が異性を引き付ける道具として発達したと考えれば、黒人の場合唇を厚くする以外に無いな」と感心します。でも、このことで「我田引水もほどほどにしろ」と D. モリスにますます不信感を持つ人も多いようです。

それだけではありません。雌の乳房が大きいのは人だけですよね。「乳牛は大きいじゃないか」と言いますが、あれは人が改良したからです。他の動物と比べても、人の乳房は授乳期でない時でも相当大きいことが分かります。つまり、必要のない時でも乳房が大きくなってしまったというのです。

性器というのは、異性を一番惹きつけるものですが、それらが他の動物に比べて見えなくなった分だけ、唇と乳房を大きくすることで雄を惹きつける意味で役立っているというのです。

そこでまたこのことを仲間に話をすると、友人達は「確かにそうだ。俺達が乳房に惹かれるも無理ないな」と納得します。

などなど、この本にはこういった興味深い考え方が随所に見られます。とは言っても、これらが全ての動物学者に同意されているわけでもありませんが、より真に近い人間の姿を探り出していくために、我々が是非耳を傾けなければならない学問のたたき台の役割を十二分に果たしています。

この本は、動物とはかけ離れた存在と思いがちな人の行動が、実は、いかに野生の本能に支配されているかを描いています。読み進むうちに、動物にも共通する人の行動をみると、当たり前だと思われていたことが魅力的に見えたり、不思議に思われていたことが突然理解できるようになったりして興奮します。

これまでの生物学のように、人を特別扱いして、他の動物として区別するのではなくて、人を動物と同じ進化の系統上にあるものとして、人の行動を観察・分析しようとした一冊です。その発想の卓抜さに狂喜するのは私だけではないようです。若い皆さんも、是非一読することを薦めます。もしかすると、君の一生を変えてしまうようなことになるかもしれませんよ。

現在、生物の研究の分野では遺伝子工学が盛んですが、生物学は今まで分からないことが多くて、これから究明していかなくてはならない分野が沢山あります。今、生物学は爆発的に発展しています。「学問の分野で、夢を追ってみよう」と考えている若い皆さん、生物学が皆さんを呼んでいますよ。

最近のアメリカでは、収入の面で言えば、1番は医者だそうですが、仕事に対する満足度までを入れると、生物学が1番だと言われています。アメリカ人は仕事の満足度と収入とは相当違ったものと考えているようです。

中学・高校時代に習った理科や生物は現象としては面白いものが多かったのですが、授業は全くといっていいくらい面白くなかったのを今思い出しています。その理由が最近やっと分かってきたように思います。

一言でいうと、「考え方を教えてもらわなかったからではないか」ということです。つまり、どういう風に問題を立ち上げて、それをどう発展させていくのかを教えないで、事実の羅列だけを覚えることで終わってしまったのが我々が習った理科であり生物であったように思います。

もともと自然には膨大な未知の部分があって、その中にほんのわずかだけ解決の糸口が混ざっている。その未知の部分から解決の糸口を見つけ出す試みが分析であって、それを定式化したものが科学というわけですね。だから、科学の根底には、「解決の糸口を見つけ出したいという欲望」があるんです。そういうことを教えないで、事実の羅列だけを覚えろといわれ、先生達の顔まで嫌いになってしまった自分を発見するというわけです。

最後に、研究者を目指す若い人たちや研究者に期待したいことがあります。それは、たとえば癌の治療などでは、まだ癌で苦しんで死んでいく人が多いにも関わらず、研究者の中には「もう癌の治療の目途はついた」と見切りをつけて、次の研究へと研究対象を変えて行く者が多いということです。その分、後に残された研究者の層が薄くなり、何時までたっても「癌の撲滅」は達成されないという事態が生じているのは残念でなりません。

本来は私的な営みである研究ですが、それを支えるのは研究費であり、そこには社会的に役に立つのかどうかという視点がどうしても必要なはずで、それが国民の税金を使って行われる研究であれば尚更で、説明責任が付きまとうことの他に、結果が社会的に役立つかどうかは避けて通れない関門のはずです。

科学の世界では二番のりでは意味がないという研究の性質上、仕方がないことではありますが、研究費を使ってはっきりした成果も出さずに、その研究費

で自分のポテンシャル・アップを図っただけで、研究テーマを乗り換えるというのはあまりにも無責任ではないでしょうか。

2002. 6. 9
